PROJECT

2011年度人形造り物セッション

文
福原敏男

共同研究 ● 民俗行事における造り物の多様性（2008-2011）

6月11、12日、民博において実施された2011年度初回の人形造り物に関するセッションについて報告する。

今回の共同研究会は4人による人形セッションであった。五月人形、祭礼人形、菊人形、見世物の人形についての発表であるが、この内、菊人形と見世物は興行として料金を取るという点で前二者とは異なる。年中行事や祭礼の人形は無料で見せるが、その作者は後二者と関わる所も多く、人形師の作製ジャンルの広範さを窺うことができる。また、本共同研究の「民俗行事の造り物」は基本的に年中行事や祭りにおいて、地域住民が作るものであることが多く、都市部ではプロの人形師に依頼する所もある。さらに、展示場所に関して、「民俗行事の造り物」は基本的に屋外であり、五月人形も座敷内へ移行した現行の形態以前は路上での展示であった。

今回は同一の素材で作った一式飾りのような人形の事例研究報告はなかったが、造り物研究における人形の役割を再検討することができた。

初日一番目は是澤博昭（大妻女子大学）の「端午の節供と人形 ── 外飾りから内飾りへ」であり、様々な画像・文献・伝承の諸資料を駆使し、五月人形が歴史的にどのような過程を経て、家屋外の往来での展示から、座敷飾りになったのか、を考察した。発表の次第は、①五月人形の系譜②五月の風習と節句飾り（端午の節供と印地・印地から菖蒲打ちへ）③五月人形の変化 ── 勇者から役者へ④五月飾りの成熟 ── 外飾りから内飾りへ⑤江戸と京の五月飾り、という構成であった。

初日二番目は菊人形研究の第一人者である川井ゆうによる「わたしと菊人形」であった。現在は廃絶した大阪枚方の菊人形から始まった同氏の20年にわたる菊人形研究の成果を披瀝した。「東京本郷団子坂の菊人形中心思考」を再考するのが一貫したテーマである。菊人形の始原は江戸東京であり、文豪が通って作品に残したのも団子坂の興行であったが、その後団子坂は廃れ、東京両国国技館に取って代わられた。しかし、近代以降の全国的な菊人形興行の展開を考えるとき、「本郷団子坂から東京両国国技館へ」という東京中心の単線的系譜ではなく、愛知県高浜市の吉浜人形、名古屋と岐阜や関西の菊人形興行の調査研究が重要であることを力説した。つまり、中京や関西も重要な役割を果たしており、菊人形史を複眼的に考察する試みが重要であるとした。菊人形の解釈についても、①見立て（奉納細工から見世物へ）②興行という視点 ③菊人形の提供する情報、の3つを総合的に捉える視点を提示した。本共同研究課題にリンクする問題として、菊人形以外に人形師の制作する等身大人形（せともの人形・吉浜細工人形・マネキン・人体模型など）との比較研究の必要性も述べた。

1841年神田祭附祭の祭礼人形（泉目吉作）。人が中に入って歩く。『齋藤月岑日記』より。

最後に菊人形は娯楽と芸術のあわい「総合技芸」という視野から研究すべきと結論され、参加者との活発な議論が交わされた。

12日の一番目は福原（武蔵大学）が「江戸の人形見世物 ── 生人形（いきにんぎょう）を中心に」と題して、「齋藤月岑が見た人形見世物・喜三郎の四十八癖生人形・喜三郎の鍾馗人形・見世物人形と祭礼人形」という4つの章立てに基づき発表を行った。

川添裕（横浜国立大学）が指摘したように近世後期の見世物に関しては、細工見世物こそが、興行の約半数を占める第一等の存在であるにも関わらず、動物芸や曲芸に研究の関心が集中してきた。人形見世物は「細工（造り物）」に分類され、からくり人形の仕掛け、菊人形の意外性、生人形の精巧さなどを特色とし、本発表では生人形を中心に行った。神田の町名主であった齋藤月岑は茅場町薬師の開帳の造り物を描いているが、境内の閻魔堂の閻魔坐像が名高く、閻魔詣の人々で賑わったことから、この造り物には閻魔に因む地獄の獄卒のイメージがあることを指摘した。月岑が足繁く通ったのが浅草奥山の生人形興行であった。19世紀半ばから明治末まで、「生きるが如く」に作られた等身大の生人形は、細工見世物興行の華であった。木製の人形の肌は胡粉を溶かして人形にふさわしい肉色をつけ、それを霧吹きで巧みにまき付けた。柔肌、もち肌にみえるつややかで滑らかな肌に、性器まで作り込まれた精巧さ、リアリズムとエロティシズムで人々を熱狂させ、松本喜三郎を始めとする名人を輩出し、大坂と江戸を始め、地方都市でも人気を競った。生人形の一部はジオラマ、パノラマ、人体模型、マネキンなど近代の娯楽や技術にも継承されたが、近代の芸術表現とは見なされず、多くが無関心のなかで失われてしまったが、近年やっと光が当てられ始めた。

喜三郎の生人形は想像力豊かな『鎮西八郎島廻り　生人形細工』（興行名、次頁は錦絵の名称）の異国人物のデビュー作が有名である。2作目の9テーマのバラエティー『風流生人形』は著名な伝承物語や芝居であった。従来、喜三郎を語るにはこの2作と遺作が残る『西国三十三所観音霊験記』であった。しかし、3作目の『浮世見立四十八癖』=「市井の人々尽くし」こそ、新境地開拓であったと思われる。2作目までは見たこともない伝奇・空想世界、残酷と性的要素がテーマであり、バーチャルな技術がなかった当時これが人気を博したのである。『四十八癖』では、「本物（実物）そっくり」感を出す「正（しょう）写し」（=正体を写す）のリアリズム志向という生人形の真骨頂を模索したのである。

1860（万延元）年、浅草寺は開帳で賑わい、それに合わせてこの『四十八癖』をもって3

錦絵（浅草奥山生人形、1855（安政2）年2月、國芳画、国立民族学博物館所蔵）、江戸での興行名は「生き大蔵」。

年ぶりに奥山へ打って出た。月岑は『増訂武江年表』に「男女四十八種の偶人（にんぎょう）を見する。喜怒哀楽の情態をうつし、さながら生ける人に向ふがごとし」と記した。

次に祭礼人形と生人形師との関わりを怪談人形師である泉目吉の作品から考えた。1841（天保12）年、神田祭の附祭に出す人形が完成した。泉目吉へ注文した前頁図のような祭礼大女人形である。泉目吉は幽霊や生首の細工を得意としたが、この祭礼人形は打って変わって、可憐な町娘を2メートル以上もの巨女にしたミスマッチを狙ったものである。泉目吉のレパートリーの広さを示す事例である。

喜三郎作品は現存の谷汲観音像に眼がいきがちであり、それを以て喜三郎を語る嫌いがあるのは仕方ない。残念ながら、四十八癖生人形の残像は確認されていないが、写実そのものであった同興行への再評価もあって然るべきだと思われる。現代人は細分化されたジャンルを前提とし、それにこだわるが、前近代では身過ぎ世過ぎのためのアバウトさがあった。生人形師も見世物人形のみでなく、祭礼（山車や附祭）人形・年中行事人形など多彩な人形を請け負っており、それらの距離は非常に近かったのである。

二番目の川添裕は「細工見世物への視点」と題して発表した。「細工見世物の定義・近世前期と後期の見世物（ジャンル別比較）・一田庄七郎・籠細工の影響力・生人形の想像力（松本喜三郎を中心に）」という章立てであった。ここで特に、福原の生人形論と異なる見解が提示された。安政期に出現した生人形の題材は近代的写実表現ではなく、フィクショナルなものであった。生人形は「本物そっくり」が真骨頂なのではなく、題材はポピュラーな伝統主題であり、むしろその形象の方法において一種のスーパーリアリズムを用いた点に特徴があった。具体的には、薄暗がりにおいておよそ数メートル離れて見たときの肌の質感こそ最大の特徴であり、これによって親しみ深いイマジネーション世界を、現にそこにあるかのごとき三次元の物体として立ち上げることに成功した。それは想像世界そのものを眼前に形象化する物質的恍惚といってよく、生人形の想像力の本質とはここにあった。

福原発表における生人形の「現実反映性」論とは対極の「想像世界の物質化」論であり、この点について特に活発な議論がなされた。つまり、リアリズムとイマジネーション、両面相まってこそ、生人形の本質を捉えうる、ということである。

以上、6月の人形造り物のセッションの紹介を行った。「神仏への奉納から娯楽へ」という単線的理解ではなく、多様な人形公開、展示の在り方が議論された。現在、町おこしや観光地活況という点で、雛人形の街頭展示が隆盛であるが、五月人形も座敷飾り以前は路上展示であったことも検証された。菊人形も枚方こそ廃絶したが、未だ全国にファンが多く、職人ネットワークも堅固であることが認識された。

今後は10月に3人（葬儀の造り物、開帳の奉納物、近世名古屋の造り物を予定）、2012年に4人（京都の造り物、金沢の造り物、造り物の工芸史、民俗行事の造り物総覧を予定）という2回の研究会を実施する予定である。

ふくはら としお

大阪市立博物館学芸員、国立歴史民俗博物館助教授、総合研究大学院大学助教授、日本女子大学教授を経て、現在武蔵大学人文学部教授（博士・民俗学）。専門は祭礼の民俗学・文化史的研究。著書に『祭礼文化史の研究』（法政大学出版局1995年）、共著に『江戸天下祭絵巻の世界』（都市と祭礼研究会編 岩田書院 2011年）など。